スイスの幼児教育

水口芳明

一　目的

私がスイスの幼稚園を見学しようと思ったのは、所謂コーナー制の保育やオープンシステムが、どのように行われているかを見て、今後の幼児教育のあり方の資料にしようと思ったからである。

コーナー制の保育については、荘司雅子氏が文部時報1975年第1177号34頁に「世界の幼児教育」と題する論文の中で次のように述べている。「ヨーロッパやアメリカなどの幼稚園の保育室は、いわゆる教室のような配置でなく、幼児の多様な活動に応じたいくつかのコーナーが作られている。すなわち同じ部屋に図書のコーナーがあり、描画活動の出来るコーナーがあり、その他粘土細工のコーナー、木工細工のコーナー、ままごと遊びのコーナー、人形劇のコーナー、部屋の中にある砂遊びのコーナー、積木遊びのコーナーなどがある。

以上のような用意された環境の一つ一つがいずれも無言のうちに、幼児の能力を刺激し、その創造活動を触発するのである。幼児はこの場におかれる瞬間、自然に自分から働きかけずにはいられない。また働きかけているうちに、自らの力を訓練している。」と。

またオープンシステムについては、荘司氏が同じ論文の35頁に次のように述べている。「数年来特にイギリスやアメリカでは、オープンシステムが幼児教育にとり入られている。つまり子供を年令別に各クラスに組み分けして、一人の担任教師だけがそのクラスだけを世話するのではなくて、全部の教師が園のすべての子どもに接するような仕組みである。もちろんクラスの担任はあるが、クラスの壁は開閉自在になっている。」と。

二　スイスの幼児教育

スイスの幼稚園は、幼年学校の第一年と第二年に該当するものであった。所謂 Kindergarten はなく、幼児学校があり、4才児5才児を収容する第一年と5才児と6才児を収容する第二年と、6才児と7才児とを収容する小学校第一学年とからなっている。幼稚園に相当する年令のものは義務制ではないが、ジューネーブ市の場合、第一年は85%、第二年は99・5%の就園率であるという。小学校第一学年は義務制である。

この幼年学校は一カ所にあるのではなく、私の見学した幼年学校は、4才児5才児だけをいれる施設と、一階を5才児6才児の幼稚園に該当するものを収容し、二階を6才児7才児の小学校第一学年に該当するものを収容している施設とであった。両者は歩いて1分間もかからない処にあった。

三　保育室内の施設

椅子は5人か6人を一つのグループにして四グループか、5グループにしてならべてあ

った。しかし夏休み中であったためか、読書コーナーとか、人形劇のコーナーとかがあるとは思えなかった。新学期の準備に来ていた先生もいたが、そのような準備をしているとも思えなかった。またそういうものを思わしめる材料も見あたらなかった。私のみたのはジューネーブ市の市立であったが、教育内容は州が決めるといっていた。

四　教育内容

幼児学校に子供をいれる母親のために、幼児学校はどういうところか、どういうことををするかということを説明する映画を、市立の視聴覚教育センターで見せて貰った。その映画によっても、またジューネーブ市庁の教育委員会発行の、Le Printemps de la vie Scolaire によっても、さらにジューネーブ市庁の教育委員会のFeyler 女史の話によっても、格別コーナー式の教育ばかりとは思えなかった。

教育内容としては、形の識別や順序を知ること、硬貨を動かして左右上下を知ることなどの Perception、日本の絵画制作にあたるÉducation artistique、音楽Éducation musicale、体育Éducation physique がある。芸術方面は力をいれているといっていた。もちろんリトミットクも盛にやっているということだった。

Environnement として、歯をみがかせたり、食事のマナーを教えたりして生活習慣の確立に力をいれていた。

しかしフランス語の授業をしたり、詩の朗読や暗誦をさせたり、文字を書かせたり、近代的数学を教えるといって集合論の数学を教えたりすることに相当努力していたようである。日本の所謂幼児教育者や幼児教育学者が聞いたら驚くようなことをしているのである。従って幼児学校の教育内容は、Langage、Lecture、Écriture、Mathématique、Activites Artistiques Rytumique、Musique、Environnement の八つであり、所謂学校的なものが多くの分野を占めているのである。

もちろん遠足もあり、園外保育もあり、父母の会合もあり、学年末には展覧会もあるが、その卒業式は頗るはでな盛大な行事のようである。市内の幼児学校が連合して行なうもので、子供にとっても両親にとっても非常に楽しい行事のようである。子供たちは着飾って、市庁の音楽隊を先頭にして市中を行進し、頑具や頑具の引き券などを大人たちから贈られるようである。

もちろん幼稚園の場合は、小学校の場合とちがって当然のことながら落第はない。

五　幼児学校は二部制

子供は午前だけ来るのと、午後だけ来るのとあって、二部制が行われているとのことであった。日本人には馴れていないことであり、日本人には我慢のできないことである。日本人は午前と午後とを通して幼稚園にあずけたがるようである。そういうお母さんの一人に一カ月の経費を尋ねたら、私立の施設であったが、月四萬圓かかるといっていた。こんな高額の負担は日本では、あまり出来そうにもないと思われる。

六　結論

種々のコーナーを設け、幼児に自主的に活動さし、創造活動を触発するということは、日本の幼稚園の多くにとって、殊に私立幼稚園にとっては困難であると私は考える。また外国においても普通の場合は、それ程多くないのではないかという感想を、Feyler 女史と話をしていてもたざるを得なかった。またオープンシステムも、日本の幼稚園にとっては困難なのではないかと思われた。次に日本の幼稚園で、こういう教育を行うことが、困難

な理由を考えていくことにする。

七　幼稚園の規模

日本の私立幼稚園が経営的になりたっていくには、私は９クラスか10クラスは少なくとも必要であると考えている。すなわち400名前後の幼稚園児を必要とすると思う。外国の場合、幼稚園はいずれも小規模である。ジュネーブの新らしい住宅団地の中の幼児学校をみても、４才児５才児を収容するものが１クラス25名で４クラス、100人を収容しているにすぎない。そこから歩いて１分位のところに、５才児６才児を１階に収容し、６才児７才児つまり小学生を２階に収容する幼児学校も、それぞれ４クラス宛合計200名を収容しているにすぎない。これらは公立であるからと思われるが、アパートの一階を借りて、１クラス10人で４クラスで経営している私立学校もあった。私のみたのは、アパート群の中の一階にあり、３才から５才の子供を収容するのであるが、１クラスしかない。フランスでみた幼稚園も４クラスしかない。つまり小規模の幼稚園が、あちらこちらにあるのである。日本ではこんな小規模では、経営も出来ないし、また十分の教育をすることも出来ない。

規模が小さいから、園児数も少ない。これでは、コーナー制もオープンシステムも可能である。20年も前にみた大阪教育大学の平野分校の幼稚園は、私がみた時は一種のオープンシステムの型で、コーナー制で見事な保育を行なっていた。やはり国立大学の附属幼稚園という人数の少ない、園児の素質を選抜したところでは可能である。しかし数年前にみた東京の幼稚園では、ローテーションとか何とか理屈をつけていたが、説明と実体とは異なり、各先生方が全園児を知るということは出来ていなかったように思われた。結局園児数が多いためであると考えられる。

コーナー制にしても、オープンシステムにしても、幼稚園の規模が小さく、園児数が少ないことが第一条件である。またクラスの人数の少ないことも重要である。

公立で１クラス25名である。それを５人か６人を１グループにするのである。これなら先生が、グループを次次と廻っても、全体を見まもりながら保育を行うことが出来る。私立の施設でも年令が小さいと、１クラス10名である。この幼稚園の規模とクラスの人員を、副島ハマ氏の「ヨーロッパの保育の原点と現状」（136頁から178頁）からみると、次のようになる。

フランクフルト　第38キンダータゲシュテーテ、園児数60名、１クラス20名、３クラス、公立。

東ベルリン、東ベルリン幼稚園、４クラス、公立。

ロンドン、キングスウッド・インフアント・スクール、４クラス、１クラス25名。

デンマーク、アマゲル・アーバンプラネン、２クラス。

西ベルリン、１クラス14名か15名。

１クラスの人数が少なく、幼稚園の規模が小さく、１幼稚園の全園児数が少ないのであるから、コーナー制もオープンシステムも可能である。

日本の幼稚園は１クラス40名が規則である。高松東幼稚園では３才児は、１クラス30名にしているが、それでも多すぎると思っている。しかし私立幼稚園を経営していくには、400名前後の園児数を必要とすると考えられるので、そんな規模の幼稚園ではとてもコーナー制も、オープンシステムも不可能である。

八　保育時間

保育時間は、午前の組と午後の組との二部制である。ジュネーブのアパートの一階にある施設の公告によると、午前９時から11時まで、午後は14時から16時までである。前記副島ハマ氏の本によっても、他のヨーロッパ諸国においても大体同様である。

午前と午後は同じ先生が受けもつようであるが、この保育時間の短かさが、或はその上に保育のくりかえしが、コーナー制やオープンシステムを可能にしていると思う。

日本の幼稚園でも、一斉保育や単元保育の時間は大して変らないとしても、保育のくりかえしはなく、弁当の時間、自由あそびの時間、その上に大低の幼稚園では通園バスにまで乗車しなければならないとすると、とても身心ともに疲れて、コーナー制もオープン制も不可能だと考えられる。

十　幼稚園の経済的基盤

公立の幼稚園はもちろん市費などの公費で賄っているのであろうが、小さな幼稚園を数多くもつことは、多くの冗費を要し高価なものになるだろうと思われる。この点日本の幼稚園は公立にしてもかなり規模が大きいし、私立に至っては題る規模の大きなものが少なくない。やはり公立にしてもヨーロッパの方が、日本よりも多くの経費を使っているのであろう。

私立の施設に午前と午後の２回ひきつづきやると、月４万円かかったことは、既に述べた通りである。アパートの１階にある施設の公告によると、月120フランとあった。邦貨の9000円位であろうか。これが１教室であるから、とても経営がなりたつはずかない。恐らく私学に対しても、かなり多額の補助金があるのであろう。

日本の私立幼稚園にも補助金が出るようになったが、公立の幼稚園児にかけている公費と比較すると問題にならない少額である。思い切って多額の補助金を出し、公立と同じ位の費用を使えるようにしなければならない。しかも基本とされる公立幼稚園にも、さらに多くの費用を支出し、１クラスの人数を少なくし、１幼稚園の規模を小さくしないかぎりコーナー制やオープンシステムは不可能である。

十一　小学校予備校としての幼稚園

日本の幼児教育者や幼児教育学者は、所謂学校的な幼稚園を極度に嫌う。教科的なことをする幼稚園を蛇蝎のように嫌う。だが両親たちはそれを求めている。従って教科的な、学校的な幼稚園が求められている。小学校の予備校的な幼稚園が求められている。父母の中には、幼稚園は遊びを主とするところだと一応理解していても、腹の中では学校的な幼稚園を求めているのである。

日本の社会は高学歴社会である。学歴の高いもの、殊に所謂名門大学出身者が、社会的に経済的に高い地位を占めるのである。しかも日本人であれば、誰でも名門学校を出て高い社会的階層に入る可能性をもっている。だから親が、多分に親の補償的願望をもって名門校を望み、その出発点として学校的幼稚園を望むことも、止むを得ないことであると思う。

日本の幼児教育学者は、学校的な幼稚園教育は小学校の学年が進むと、そういう教育を受けたものも受けなかったものも、同じ学力になるから、小さな時にする必要はないと主張して学校的な幼稚園に反対する。これはおかしな議論である。小学校へ入っても前の学校的な幼稚園教育を続ける小学校があって、その教育結果とそういう幼稚園教育を受けず

小学校へいったものを比較して同様の結果になるなら、上のようなこともいえよう。だが実際にはそういう学校的な幼稚園教育は中断され、そういう教育を受けたものも受けなかったものも、同じ教育を受けるのだから、いわば同じにしようとしているのであるから、数年のうちに同じようになるのは当り前である。だから学校的幼稚園教育をうけてもうけなくても、同じだということにはならない。

現に中学校と高等学校と続いている私立学校の場合、その七年制が学力の点においては大きな効果をあげていることはよく知られている。そういう学校は東京になくとも、神戸にあっても、鹿児島にあっても成績をあげている。継続していることが、大きな成績をあげている理由である。幼稚園教育の場合小学校との継続教育がなく、同じ教育をしていて同じになるから、以前の幼稚園教育は役に立たなかったというのは、全く筋の通らない議論である。

小さい時に子供の能力を触発しなくては、子供が発達しないことはいうまでもないことである。ゲセルの狼少女たちにしても、イタールのヴイクトルという少年にしても、幼児の時狼や自然の中に育てられたのでは、能力は発達することはない。コーナー制の幼稚園教育にしても、幼児の能力を触発し、その開発を目指しているではないか。教科的なものを子供の発達にあったように、自発的に興味をもたせ、幼児の能力を開発するように工夫するのが何故悪いであろうか。あそびを目標とするのでなく、あそびを教育方法として教科的なものを刺激、発達させることが悪いといえようか。

ヨーロッパの幼稚園をみて、殊に幼児学校をみて、学校的なプログラムをもっていることを知った。私が選んだのが、平均点な幼稚園、必らずしも有名でない幼稚園であるからかも知れない。それはヨーロッパ一般に行われている幼児教育を知るためであり、みせるための幼稚園や実験的な幼稚園を選ばなかったからかも知れない。現実に普通の多くの幼稚園で行われているのは、かなり学校的な幼稚園である。

幼児学校は、日本の現在の幼稚園と小学校の低学年を一つの学校にすることで、これは多くの学者が主張し、日本でも一時その声が高まり、その試みが実践に移されそうな気配さえあったが、小学校長会の反対でいつの間にか、その声が聞えなくなってしまった。いわば幼児学校は、その先導的試みの一つである。

幼児学校を幼児教育の先導的試みの指標と考えるならば、幼児学校で行われている教科的なものを、一言にして悪るい、幼稚園教育本来のものでないといえようか。私は教科的なものも、その教育方法を考えて、十分検討すべきことだと考えるのである。

十二　再び結論

コーナー制の幼稚園、オープンシステムの幼稚園が成り立つためには、幼稚園の規模が小さく、１クラスの人数の少ないことが必要である。そのいう教育を可能にする財政的援助を国家がしなければならない。また背景としての日本の社会構造を無視することは出来ない。

また日本の所謂幼児教育学者の嫌悪する学校的幼稚園のやり方も、幼児学校を教育制度の一つの先進的指標と考えるとき、無視することは出来ないであろう。

このいわば背反するとさえ思われる二つの教育的思想を、研究、実験、実践することによって、今後の幼児教育のあり方に示唆を与えられるのではないだろうか。

参照文献

文部時報、１９７５年　第１１７７号。
副島ハマ、ヨーロッパの保育の原点と現状。
Département Livs Livstruction publique Genév , Le Printemps de la vie Scolaire。
同上　Vous qui aimez les enfants

高松短期大学研究紀要

第　6　号

昭和51年3月1日印刷
昭和51年3月10日発行

編集発行　高松短期大学
〒761－01　高松市春日町 960

印　刷　新日本印刷株式会社
高松市木太町 2158